

生 砲科

復員 昭和二十四年七月五日

復員後 学校教員（栃木県内の小中学校の教員・

校長を歴任）

定年退職 昭和五十五年四月一日

教育委員会 全抑協今市支部長

（栃木県 野沢 芳夫）

思い出

栃木県 宮崎 正 三

栃木県小山市大字中島に、大正十三（一九二四）年

三月二十六日に生まれ、家は農業、養蚕、結城紬にて生計を立てていた。昭和五（一九三〇）年四月、絹尋常高等小学校入校。昭和十三年三月、同校高等二年卒業。同年四月、青年学校入校。昭和十八年三月、青年学校五年卒業しました。

昭和十九年一月、徴用にて日光電気精鋼所にて兵器

生産に精を出した。

昭和十九年十一月二十五日、神奈川県東部八八部隊に関東地方より現役兵六百人が集合しました。

十二月二十七日、一時より面会がB 29のため五分間にて終わってしまいました。

十二月三日、同部隊出発し、横浜駅十七時頃出発いたしました。

十二月五日、早朝下関に着き、門司へ行き、松ヶ江兵舎にて二泊して、門司より日向丸に乗船しました。

十二月八日、朝八時頃出発して十七時頃朝鮮に着いた。妙覚寺に泊まっていました。釜山を十二月十三日、汽車にて出発して、十二月十六日早朝、新京（長春）に着いた。

南嶺の七五八〇部隊にて通信教育を受けた。毎日トントントントの教育でした。一週間に一日教練があった。

昭和二十年四月下旬、牡丹江に行った。七五八〇部隊より五十人くらい、七五八五部隊でした。

五月十日頃、七人が延吉（間島）に第三軍の通信と

して行つた。八月九日、ソ連軍侵入により司令部が二キロメートルくらいの所に移り戦闘司令部にした。中将村上軍司令官、外に少将が五人いたが、兵器は無いに等しいくらいでした。間島は七五八五部隊で、加藤木敏雄隊長で隊員発信所として三十人くらいでした。

八月十五日、私が電報配達したところ、不明の所があると思つた。藤原班長が問い合わせのところ、見たら関東軍ホーキスとあつた。これはと思つた。四時頃、大崎班長と長野同年兵が来て、戦争は終わった、内地へ帰るんだと言つて来た。七時頃、軍司令部に白旗が上がつた。十六日、元の司令部に戻り武装解除された。

八月下旬、三万五千人くらい集合して来た。九月十三日、私達は十一大隊にて千人で出発した。行軍でした。琿春、豆満江を通り、国境を通過してソ連へ、そして日本に帰るとの事で歩きました。

九月二十日、ボセツト港に着き、小高い所で野営でした。九月三十日、汽車に乗り、十月六日、コムソモリスクに着いた。七日、八日と歩いて着いた所がホル

モリンの二〇一分所でした。

約千人のゲルマン人が入つていたというバラックの家でした。これから作業に入りました。大工や道路工事や土工や色々な仕事に精を出していた。ホルモリンにいた時から民主運動が始まつた。

コムソモリスクに移り山仕事で三級になり、ソ連のカンポイに松の実を取つてやったのが隊長に知れて、二十三年秋、ソ連隊長と山に何回も松の実取りに二人で行つた。一本の木で八十、百くらい取れる。一番多い木で百六十も取れた木があつた。私が木から落ちると隊長がチョロマだから無理はしないようにと何回も言われた。帰るとパン、スープでもてなしてくれた。隊長は取つた物をバザールで売つたものと思われま

す。
コムソモリスクでは共産党教育があり、平塚分所にいたのでボルシェビキ党史やレーニンの本等、色々な教育された。

二十四年七月、分所全員汽車で七日目にナホトカに着いた。七月下旬、明優丸にて日本に帰つて来た。大

船まで家の人達が出迎えに来てくれたので皆と別行動にて結城駅に帰って来ましたら、部落の人達が出迎えてくれた。八月八日、四年九カ月ぶりに自宅に着いた。

今も元気に生活しています。先祖のおかげと毎日感謝の気持ちでおります。

シベリア収容所生活の三カ年(二)

栃木県 加藤 源四郎

召集 昭和十九年 一二九六八部隊(新京)

階級 一等兵(終戦は奉天)

収容所 サマルカンド(中央アジア)

帰国 昭和二十三年九月

帰国後 会社員(現状 無職)

うそつきソ連兵と数え方

終戦を奉天(瀋陽)で無線で知った。ソ連兵はヤボ

ンダモイ、ヤボンダモイととなりながら、装具は持てるだけ持て、ベストトラベストラと、約千人くらい列車に乗り込んだ。列車は走りだし、どの辺か小さな坂らしい所で止まった。全員下車して列車を押す。徐々に動きだし、また乗った。生まれて初めての体験だった。列車は北へ北へと……。

准尉は車中で、今晚あたりシベリア本線に入るだろう、翌朝太陽が前方に見えたら日本に帰るのだ、しかし後ろから明るくなったら捕虜だ、まあ三年くらいは覚悟しなければならんぞ。太陽は後ろから、なんだソ連兵のうそつき、俺たちはどうなるんだらう。誰もが不安な顔つきで黙っていた。

列車は草原や林の中を西へ西へと走り続けて四十日目に、何もない草原の終点に到着した。それから千人の行列、重い荷物を背負って湖の端を通り四時頃収容所らしい土の屋根舎の入口に集結した。一時間ぐらいで門が開き、中から囚人らしい粗末な姿をした女二十人ぐらいが二人の歩哨に連れられてどこかへ移動して行った。収容所の裏は小高い岩山、前はダムの湖。は